

サンノゼにおけるチカノ学生運動の概要と展開

丸 山 悦 子

はじめに

チカノ学生運動とは1960年代後半から1970年代初頭に隆盛した、メキシコ系アメリカ人による一連の公民権運動において、とくに南西部州の大学を舞台に、学生のイニシアティブにより推進された運動である。参加者の裾野は広範囲に渡り、高校生も参加して活発な授業ボイコットを行い、大学当局に対しプログラム改善を求めるデモンストレーションを実行するなどした。運動がメキシコ系コミュニティに与えたインパクトは大きく、最盛期の1968年には、ロサンジェルス地域だけで1万人以上の学生が関与したといわれている。¹

同時代に展開された公民権運動と比べ、メキシコ系住民によるチカノ運動への認知度は、米国でも日本においても高いとはいえない。メキシコ系アメリカ人学生による「異議申し立て」ともいえるチカノ運動であるが、メキシコ系学生の運動がチカノ研究家・史学者以外に取り上げられることは稀であった。例えば、これまで同時代の社会運動に関する研究は、SNCC (Student Nonviolent Coordinating Committee) のような人種差別撤廃への非暴力抵抗運動や、SDS (Students for a Democratic Society) に代表されるベトナム反戦運動のように、アフリカ系アメリカ人と白人学生を中心とするものが中心であった。² また、他の人種マイノリティによる政治運動においては、アメリカン・インディアン・ムーブメント (AIM) のような先住民復権運動や、日系アメリカ人によるリドレス (第二次大戦中の日系人強制収容に対する補償要求) の方が、チカノ運動よりも認知度が高い。その理由の一つとして、チカノ学生運動が上述のAIMやリドレスなどのように、当時の活発なエスニック・リバイバル運動の狭間で、一連の現象の一つの支流のように捉えられていることがある。

チカノ学生運動の位置づけに関する不明瞭さの別の要因は、メキシコ系アメリカ人として突出した知名度をもつ人物にセサル・チャベスがおり、彼の農

業労働者運動がチカノ運動の主要な部分として理解されていることである。チャベスは確かに有能で、カリスマ的な魅力をもつリーダーであった。彼がメキシコ系アメリカ人コミュニティに及ぼした心理的、思想的インパクトは甚大であった。このことは、マニエル・G・ゴンサレスがチャベスについて、「メキシカン社会のほとんどの人々の政治への関心を起こさせることに成功し、このことがチカーノ運動に対する彼の最もすぐれた貢献であった。」という記述からも明らかである。³ チャベスが農業労働者運動を成功に導き全国的な知名度を得たことで、メキシコ系アメリカ人とその政治運動への認識度は高まった。しかし、同時期に並行して発生していた急進的なメキシコ系アメリカ人の民族思想—チカノ主義（チカニズモ）—に共鳴する学生が精力的に展開した、チカノ学生運動への意義づけは曖昧であり、十分な関心が寄せられてるとはいえない。

チカノ学生運動への新たな射程

上述のように、チカノ運動に関する先行研究は、他のグループとの差異化が不十分であったり、特定のリーダーの功績に注目が偏ってきた。本稿ではこのような先行研究が拾いきれない運動の側面に注目し、新たな射程でチカノ公民権運動を捉えたい。その試みとして、メキシコ系アメリカ人学生が展開した具体的な活動に焦点を当てる。自らもチカノ運動に身を投じた歴史家のカルロス・ムニョス・ジュニアは、チカノ運動の根幹にはメキシコ系アメリカ人青年の存在があり、なかでもチカノ学生が運動の推進力であったことを強調している。⁴ また、チカノ史学者のロドルフォ・アクーニャは、運動の思想がメキシコ系青年層、特に貧しいメキシコ人居住区に暮らす青年たちを糾合したと述べている。青年たちのアイデンティティの葛藤や不満の受け皿としてチカノ学生運動は機能し、発展していったことがうかがえる。⁵

さらに本稿では、具体的な事例として北カリフォルニアを舞台としたチカノ運動の事例を取り上げ、特にサンノゼ市近郊で展開された出来事を概観する。まず同地域でチカノ運動が盛んとなった歴史的、また地理的背景に触れ、さらにメキシコ系アメリカ人学生が運動を展開するなかで、大学当局や他のエスニック・グループとの間で経験した対立にも触れる。それらの描写を通し、チカノ学生運動はメキシコ系学生の間だけで孤立的に存在していたものではなかつ

たことを示唆する。

1. サンノゼ市の地理的および歴史的概要

サンフランシスコ湾岸地域南部に位置するサンノゼ市とその近郊は、「シリコンバレー」と呼ばれて久しい。半導体や様々なソフトウェアの製造会社、eBayやFacebook等のインターネットを媒介としたサービス、Apple ComputerやHewlett Packardなど、大手のコンピュータメーカーがひしめき合うハイテク産業の街である。住民の多様化が進んだ現代も、サンノゼにおけるメキシコ系住民の存在は大きい。2000年センサスに基づくサンノゼ市内人口の内訳は、エスニック・グループ別にみると、市の総人口85万人余のうちメキシコ系と答えた人は約22万9千人で、全体の26.8%を占めている。これは白人を除くエスニック・グループの中で、単独で最大の人口集団である。次に続くのは、約6万8千人の中国系（台湾人を除く）で、市人口の8%余りを占める。三位は約4万9千人のヴェトナム系で、全体のおよそ5.8%である。以下、約4.9%のフィリピン系、そのあとアフリカ系アメリカ人とインド系人口がほぼ同数（約3万2千人）で続いている⁶。これらの数字が示すように、サンノゼ市におけるメキシコ系住民の割合は、他のエスニック・グループと比べ、際立って高い。

コンピュータ産業が進出する以前のサンノゼは、周囲に広大な果樹園が広がり、農業が産業の支柱であった。かつてのサンノゼは全く異なる趣きをもっていた。果樹園と缶詰工場が立ち並び、そこで就業する多数の労働者が住まう農業の“谷”だったのである。⁷1900年を過ぎる頃には、灌漑設備の拡充により大規模な果樹園栽培が本格化した。すると作物の手入れや収穫に必要な労働力を満たすため、多くのメキシコ系住民がサンノゼに移り住むようになった。サンノゼがあるサンタクララ郡は豊かな気候に恵まれており、桃やアプリコット、プルーン等の栽培に適していた。手間と繊細な作業を要する果物栽培であるが、メキシコ人労働者はその重要な担い手として、サンタクララ地域一帯の果樹園産業を支えることとなった。1934年生まれで、サンノゼで育ったソフィア・メンドーサは、当時のサンノゼには多くの缶詰工場と果樹園が存在していて、その労働者の大部分がメキシコ人だったと述懐している。かれらの仕事は移住型であり、春にはさくらんぼを、続いてアプリコットを収穫する。そして季節が移ると今度はプルーンやクルミを収穫していたという。⁸

第二次世界大戦を経たのち、サンタクララ郡があるサンフランシスコ湾岸地域には軍需産業が招致され、関連企業が次々と立ちあがっていった。その過程でサンノゼの様相は急速に変化していくのである。住民の中心は農業労働者から、新興産業に従事する知識と技能を持ちあわせた中産階級が集まるようになった。J. A. ロドリゲスによると、1940年から1965年の間に、サンタクララ郡では人口比に占める農業労働者の割合が22.6%から7%に急落している。⁹ またサンノゼは、サンフランシスコ郊外のベットタウンとして魅力的な地理条件にあったことから、行政による都市計画の対象となり、大規模な道路建設や住宅整備が行われていった。¹⁰ 近郊地域にはフォードやジェネラル・モーターズといった大手企業の工場も建てられ、サンノゼの人口増加と経済発展はいっそう勢いを増していったのである。

2. サンノゼにおけるメキシコ系コミュニティの発展

上述のように、サンノゼは急速な経済成長と産業構造の変化を経るなかで、学歴を積み行政の要職に就くメキシコ系アメリカ人中産階級が台頭するようになっていく。都市化による行政区域の拡がりや歩調を合わせるように、かれらの多くは古いメキシコ人居住地を抜け出し、郊外の豊かな地域へと移っていった。¹¹ その一方で、縮小する農業産業で仕事を失ったメキシコ系労働者とその家族たちは、新たな雇用を求めて農村から都市中心部への移動を余儀なくされた。1950年にはサンノゼ市に居住するメキシコ系住民は8,500人余りであったが、1960年には2万5,000人へと膨らんでいる。¹²

こうしてサンノゼ市内とその周辺には異なる背景をもつメキシコ系住民が混在するようになっていった。人々の職種や階級、雇用形態、また居住地域の環境は様々であった。例えば、サンノゼ市東部にあるEast San Joseと呼ばれる地域には、典型的なメキシコ人集住区（パリオ）が形成されていくが、住民の多くが低所得者世帯であった。人々が生活上で直面する問題は1950年代になると次々と顕在化し、貧弱な住まいや生徒を収容しきれない学校、高い失業率など、一朝一夕には解決できない問題ばかりであった。¹³ これらの諸問題をメキシコ系住民への差別の現れと捉え、解決にはエスニック集団としてのメキシコ系住民の糾合が不可欠と考えるメキシコ系中産階級が現れるようになる。その多くは自営業者か、大学を出て弁護士などの専門職にある若い年齢層のグループであ

った。かれらは精力的に住民を組織化するための活動に関与していく。¹⁴ その代表がCommunity Service Organization (CSO) であった。

3. Community Service Organization (CSO)

上述のように、新興都市サンノゼが引きつけた多様なメキシコ系住民層と人々をもつ潜在性は、新たな住民運動の開始を告げることになった。CSOとは1947年に作られたメキシコ系アメリカ人のための相互扶助組織で、本格的なメキシコ系公民権団体の草分けであった。もともとはロサンジェルスで創設されたCSOだったが、北カリフォルニアを代表するメキシコ系コミュニティとして、サンノゼが同組織の活動拠点になるのに時間はかからなかった。

CSOはサンノゼ地域一帯のチカノ運動の発展にいくつかの点で重要な役割を果たすことになる。第一に、運動の知名度を高めるメキシコ系アメリカ人リーダーを輩出した点である。CSOの草創期に組織の発展に寄与したのがフレッド・ロスである。ロスはCSOの中心人物として活動をしていたが、生まれ故郷のサンフランシスコにほど近いサンノゼにおいて重要な人物と出会いを結んでいる。その一人がセサル・チャベスであった。若き日のチャベスはサンノゼでCSOの活動をしていたロスに見出される。彼はロスのコミュニティ活動と指導力に大きな感化を受けるのである。ロスからコミュニティ・オーガナイザーの訓練を授けられたチャベスは、やがてCSOのサンノゼ代表となり、後年は同地のメキシコ系アメリカ人住民をチカノ運動に糾合していくこととなる。

第二に、CSOの活動はサンノゼのメキシコ系アメリカ人学生の組織化を後押しし、チカノ学生運動が開花する土壌をつくった。大学に進学するメキシコ系アメリカ人は1950年代から少しずつ増えていたが、1960年代に入ると大学側やメキシコ系アメリカ人団体による進学促進活動が功を奏して、サンノゼ市内の大学に通うメキシコ系学生数は目に見えて増加していた。ロドリゲスによると、1968年にサンノゼ州立大学に在籍していたメキシコ系アメリカ人は243人であった。その数は1970年には1,248人と飛躍的に伸びている。¹⁶ 上述のロスがサンノゼで活動をするようになったきっかけは、当時サンノゼ州立大学で教鞭をとっていた社会学の教授が、彼を授業に招いたことであった。ロスが行った人種関係についての講演を聞いたメキシコ系青年の参加者たちは彼に触発され、同地域の住民相互扶助活動に尽力していくのである。¹⁷

学生の組織化はサンノゼ州立大学だけにとどまらず、近隣のサンノゼ・シティカレッジでも活発化していた。CSOの活動家であったアルマンド・バルデスは、同カレッジでStudent Initiative (Si) を結成した。Siは大学執行部に対し、メキシコ系アメリカ人学生の入学奨励や、学業援助プログラムの要求を行った¹⁸。これは全国的にもメキシコ系アメリカ人学生運動の先駆けとなるグループであった。¹⁹ 上述の学生組織が、近郊のスタンフォード大学やカリフォルニア大学バークレー校といった名門校で学生運動が活発化する前に立ち上げられたことは注目に値する。サンノゼ州立大学、サンノゼ・シティカレッジはともに、労働者階級や移民学生が多く在籍する地元密着型の大学である。つまり、構成学生の多くは日々の生活において、経済格差や教育機会の不均衡などに直面する状況が少なからずあったと想像される。またメキシコ系学生の年齢は、一般の大学生よりも年長である場合が多かった。高校を出てすぐに進学できる人は少なく、いったん就職をして働きながら数年間をコミュニティ・カレッジで学び、そのあと大学に編入するというケースが一般的だったのである。²⁰ このような学生の背景から、具体的な社会問題の解消に関与したいと考え、チカノ学生運動に身を投じる人が多くいたことが推測される。

4. サンノゼ州立大学における学生運動の萌芽と公民権運動の影響

では次に、サンノゼ州立大学で展開されたメキシコ系アメリカ人学生運動に焦点を当て、具体的な事件や出来事、デモンストレーションなどについて概観する。上述したように、サンノゼ州立大学では1960年台後半から、メキシコ系アメリカ人学生の増加が顕著になっていった。背景には、公民権法の成立にともない、連邦・州政府による様々な援助プログラムの普及がある。例えば、大学の主導により実施された1968年の教育機会均等プログラムや、同様の教育地域奉仕プログラムにより、農村地域に暮らすメキシコ系青年が数百人単位で大学進学を果たすようになった。²¹ さらに、メキシコ系アメリカ人のなかには復員軍人援助法 (G. I. Bill) を利用して大学教育を受ける者が増えたことも、進学率の向上をもたらした。メキシコ系住民を取り巻く教育環境がこのように変化していたとき、周辺社会では公民権運動とベトナム反戦運動の気運が高まっていた。大学のキャンパスで知的・政治的刺激を受けたメキシコ系アメリカ人学生が、同時代の社会運動に触発されるのは当然であったといえる。サンノゼに

におけるチカノ学生運動は、内外ともに萌芽の環境と条件がこの時期に揃ったのであった。

チカノ学生運動はその理念や展開方法において、アフリカ系アメリカ人の公民権運動に大きな影響を受けていたと指摘する研究は多い。²² メキシコ系学生の活動家のなかには、チカノ運動に従事する以前は学生非暴力調整委員会 (SNCC) の熱心なメンバーであった者も多く、Siを設立したアルマンド・バルデスもその一人であった。²³ サンノゼ州立大学におけるチカノ学生運動も例外ではなく、アフリカ系アメリカ人の運動を踏襲する手法がとられていた。同大で社会学を教えていたアフリカ系アメリカ人のハリー・エドワーズは、公民権運動の思想や人種理論、活動の具体的な展開方法について、学内のメキシコ系アメリカ人学生を大いに触発した。サンノゼ州立大学においてSiから発展して誕生した学生組織のMASC (Mexican American Student Confederation) は、1968年の5月に、チカノ解放をうたった集会を開催している。会合はセサル・チャベスが来賓として招かれたり、示威行動として学長室への行進を行うなど、メキシコ系アメリカ人学生が大学に異議申し立てを行う精力的な催しとなった。ハイライトは大学執行部へメキシコ系学生が改革要求をつきつけ、それに応じなければ大学の卒業式をメキシコ系アメリカ人学生がボイコットをするというものであった。この抗議手法はSDSのやり方を真似たものであったと、当時参加した学生は証言している。²⁴

メキシコ系アメリカ人リーダーのなかには、アフリカ系アメリカ人を強く意識し、人種グループとしての両者の間に連帯を築こうとする発言が折々に見られた。例えば、政府の公平雇用政策に従事していたあるメキシコ系長官は、1964年にサンノゼで演説をした際に、アフリカ系アメリカ人とメキシコ系アメリカ人に対する人種差別を対比し、「我々はマイノリティである。」と捉えるよう、メキシコ系アメリカ人の聴衆に促している。²⁵ このようにアフリカ系と人種意識を共有しようとする試みは、実際に具体的な形で模索された。1968年3月のサンフランシスコ・クロニクル紙は、「マイノリティーが全国的な連合を形成」との見出しで、あるニュースを伝えている。記事によると、当時メキシコ系アメリカ人の政治闘争をリードする象徴的存在であったレイエス・ティヘリナと、同じく著名なメキシコ系アメリカ人リーダーのバート・コロナが、アフリカ系アメリカ人議員のマーヴィン・ディマリーと会見し、互いの連携を確認し合っ

ている。この連合は、キング牧師を筆頭とする南部キリスト教指導者会議との提携も視野に入れていた。その理由としてコロナはこう述べている。メキシコ系とアフリカ系は人種マイノリティ・グループとして問題解決にそれぞれのアプローチをとっているが、ひとたび同胞の若者が暴力の対象にされた際には、アフリカ系、メキシコ系を問わず、怒りをもって団結し対処するのだと。²⁶

5. 共闘から対立へ——アフリカ系アメリカ人グループとの関係変化

このように、当初はメキシコ系アメリカ人リーダーはアフリカ系アメリカ人の人種闘争に自らの境遇を重ねる発言をし、公民権運動を手本としてチカノ運動を展開していくことをためらわなかった。しかし、両者の連携は理想的な人種共闘に結実することはなかった。むしろ、対立や反目を生むケースも見られたのである。その一例がサンノゼ州立大学で起こった“A Day of Concern”事件である。これは1967年11月に学内で上映されたドキュメンタリー映画をめぐるものであった。A Day of Concernというタイトルのこの映画は、サンノゼ州立大の教員が後援したもので、11人のアフリカ系学生と4人のメキシコ系アメリカ人学生へのインタビューを基に作成された。大学で人種マイノリティ学生が抱える苦労や問題を描く意図で作られた作品であったが、メキシコ系アメリカ人学生のグループは、アフリカ系に内容の比重が偏り過ぎていると批判したのである。その理由は、アフリカ系アメリカ人はサンノゼ市人口の2%に過ぎないのに、20%を占めるメキシコ系に重きが置かれられないのはおかしいというものであった。つまり、メキシコ系アメリカ人は数のうえで最大のマイノリティであるが、同時にもっとも困窮しているグループであると主張したのである。メキシコ系学生グループは上映中止を強く求め、大学当局に働きかけた結果、内容はかれらの意思に沿う形で修正されることになった。しかしこの事件を通して、アフリカ系アメリカ人グループは大きな不満を募らせ、両者の関係は悪化してしまうのである。²⁷

メキシコ系学生グループとアフリカ系グループとの間に強固な連帯が定着しなかったのは、ひとつには政府から供給される資源の分配をめぐる問題があったと考えられる。当時EOP (Educational Opportunity Programs) と呼ばれる制度が導入され、奨学金制度の拡充が行われていた。メキシコ系をはじめとするマイノリティ学生が学業を続けるうえで重要なこのプログラムは、アフリカ系

学生にとっても不可欠の制度と認識されていた。EOPにより提供される資金をどちらのグループがより多く獲得するかは、両者の間で大きな関心事となり、同時に二つのグループの関係に溝をもたらしることになった。ムニョス・ジュニアによると、メキシコ系アメリカ人学生の全米的組織である MEChA (Movimiento Estudiantil Chicano de Aztlán) は、EOPを重要視し、積極的にその問題に関与している。資金配分をめぐりアフリカ系だけでなく、白人リベラルグループとも対立を避けられず、最後はメキシコ系アメリカ人学生が恩恵を受けられる形となる措置を得るに至っている。²⁸ この事例を通し、公的資金の獲得は公民権運動期の人種マイノリティ集団にとり、非常に重要な政治的アジェンダであったことがうかがえる。その対応をめぐり、上述のようにメキシコ系とアフリカ系学生は反目するが、それほど当時の人種グループ間の関係は、繊細かつ流動的なものであったと推察される。

おわりに

サンノゼ州立大学は、その後、全米で初めて大学院にメキシコ系アメリカ人研究プログラムを設置した。1969年の正式開講に先立ち、実験的なチカノ研究の授業は1966年という早い時期から開始されている。プログラム開始の背景には、メキシコ系アメリカ人学生組織による大学当局への活発な働きかけと、時には高圧的で挑戦的な直接行動やキャンペーンがあった。

サンノゼにおけるチカノ学生運動の発展は、メキシコ系アメリカ人学生だけの孤立した環境下で可能になったとは考えられない。実際、運動の展開にはアフリカ系アメリカ人の公民権運動に刺激された部分が多く、両グループの間には人的な交流が密な時期もあった。また、当時のサンノゼの人口動態の変化や産業構造の変化といった外的状況も、チカノ学生運動が発生する下地に少なからぬ影響を与えた。以上のように、サンノゼを事例としたチカノ学生運動を概観したが、その事象は歴史的、地理的、そして人的な面で外環境から影響を受けて展開されており、言いかえれば流動的であったと捉えることができる。今後さらに、サンノゼ地域のチカノ運動の分析において複合的な視野をもち、より広い文脈からその運動を吟味する研究が求められると考える。

註

- 1 マニユエル・ゴンサレス『メキシコ系米国人・移民の歴史』中川正紀訳（明石書店、2003年）、389; Carlos Muños Jr., *Youth, Identity, Power: The Chicano Movement* (New York: Verso, 1989), 64.
- 2 Muños, Jr., 1-3; Juan Olivérez, “Chicano Student Activism at San Jose State College, 1967-1972: An Analysis of Ideology, Leadership and Change,” (Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley), 33.
- 3 ゴンサレス、373.
- 4 Muños, Jr., 12, 15.
- 5 Rodolfo Acuña, *Occupied America: A History of Chicanos*, 5th ed., (New York: Pearson Longman, 2004), 326.
- 6 U.S. Census Bureau ホームページ American Community Survey より。ACS: 2001 S01 Tabular Profile for San Jose city—Table 1; “2001 Supplementary Survey Profile, San Jose, City”; (<http://www.census.gov/acs/www/Products/Profiles/Single/2001/S01/Tabular/160/16000US06680001.html>)
- 7 Stephen J. Pitti, *The Devil in Silicon Valley: Northern California, Race, and Mexican Americans* (Princeton: Princeton University Press, 2003), 82.
- 8 Sofia Mendoza interview, Chicano Studies Library, San Jose State University.
- 9 Joseph A. Rodríguez, “Ethnicity and the Horizontal City: Mexican Americans and the Chicano Movement in San Jose, California,” *Journal of Urban History* 21 (July 1995), 601.
- 10 Rodríguez, 598-600.
- 11 Rodríguez, 604-605
- 12 Pitti, 149.
- 13 Rodríguez, 603.
- 14 Pitti, 154.
- 15 ゴンサレス、366; Pitti, 152.
- 16 Rodríguez, 610.
- 17 Pitti, 150.
- 18 Muños, Jr., 51-52.
- 19 Pitti, 187; Muños, Jr., 51.
- 20 Rodríguez, 610.
- 21 Pitti, 178; Rodríguez, 610.
- 22 Acuña, Chapter 13; 加藤薫『21世紀のアメリカ美術 チカノ・アート：末梢された〈魂〉の復活』（明石書店、2002年）、127;
- 23 Muños, Jr., 51.
- 24 Olivérez, 38.
- 25 Pitti, 179.
- 26 “Minorities Forming A National Coalition,” *San Francisco Chronicle*, March 9, 1968.
- 27 Pitti, 179.
- 28 “Black, Brown, EOP: Come Together Now,” *Cry of Color* 1(1), April 1970; Muños, Jr., 85.